

## &lt;Education Program 2&gt;

## ハンセン病の臨床

岩田 誠

(臨床神経 2010;50:787)

Key words : ハンセン病, ハンセン病ニューロパチー, らい反応, らい菌

ハンセン病の原因病原体である“らい菌”は、末梢神経系の Schwann 細胞に好んで寄生するため、この病気は末梢神経の細菌感染症であるといえる。この細菌は、ヒトの体内において温度の高いところでは生育しにくく、温度の比較的低いところで増殖するため、皮膚表面に分布する末梢神経系の Schwann 細胞の中に住みつく。したがって、臨床症状としては、皮膚に分布する末梢神経の障害による症候が現れてくる。それと同時に、皮膚そのものにも異常を生じ、皮膚症状としての皮疹を生じる。

ハンセン病の臨床症状を理解するためには、宿主側の免疫応答の様式の多様性を知らねばならない。体内に侵入した“らい菌”に対し、多くのばあい宿主側の免疫系は直ちに反応し、感染を成立させないように働く。しかし、たまたま宿主側の“らい菌”に対する免疫反応が十分でないと、“らい菌”は Schwann 細胞内に侵入し、感染が成立する。そのような宿主の Schwann 細胞内では、多数の“らい菌”が寄生する事になるが、免疫反応が生じにくいために、その周囲には炎症反応な

どはみられない。これに対し、最初は免疫系の作用が弱いために、一旦感染が成立しても、その後に“らい菌”に対する免疫反応が強くなるばあいがあるが、そのようなばあいには、感染細胞を中心として局所的な炎症反応が生じ、ばあいによっては肉芽腫病変を作ったりする。その場には、周囲組織の破壊を生じる。このような宿主側の反応性の違いが、臨床症状の表現型を大きく変化させる。

ハンセン病ニューロパチーにおいても一つ重要な事は、entrapment neuropathy や、無痛にともなう外傷性の合併症、あるいは組織欠損である。これらの二次的な障害は、重大な身体障害を生じる要因であると同時に、十分な患者教育によって防ぐ事ができるという点においても、きわめて重要である。また、ハンセン病の治療薬によって生じる“らい反応”も、時に重篤な障害を残しえるという点において重要である。抗“らい菌”薬によるハンセン病治療は、臨床的にきわめて有効であり、長期の治療により神経症状に改善がみられることが確認されている。

## Abstract

## Neurological aspects of leprosy

Makoto Iwata, M.D.

Tokyo Women's Medical University

(Clin Neurol 2010;50:787)

Key words: leprosy, leprosy neuropathy, leprosy reaction, mycobacterium leprae